“新生”郁文館学園　改革の軌跡とビジョン

●郁文館学園理念・目的

郁文館学園理念：子どもたちの幸せのためだけに学校はある
郁文館学園目的：子どもたちに夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせる

●郁文館学園の基本精神

【郁文十訓】

一、笑顔で元気よく挨拶のできる礼儀正しい人となれ
一、「我以外皆、師なり」の心を持つ謙虚な人となれ
一、自ら学び、自ら律し、自ら歩む自立の人となれ
一、日々前進を試みる挑戦の人となれ
一、他人の喜び、悲しみを共有できる思いやりの人となれ
一、約束を守り、嘘をつかぬ誠実な人となれ
一、不正義を許さぬ勇気の人となれ
一、正しいと思い決めたことは、あきらめずに最後までやり遂げる忍耐強き人となれ
一、美しきものに感激できる、正直の人となれ
一、成功の後に感謝できる素直な人となれ

※この郁文十訓は、毎朝、生徒は「夢」シートに成否（前日の自分の振り返り）をチェックします。

●郁文館学園の教育方針（IQ・EQ・SQ）

IQ：学力（人生で成功するための知識）
EQ：社会性・心の前向き度（人生で成功するための心の態度）
SQ：人生観（人生で成功するための羅針盤）

※　郁文館学園の全ての行事、カリキュラムはこの３つの要素を均等配分して組んでおります。

●　郁文館学園の目標

6 年後に東大 20 名、起業家輩出、日本一を作る

※東大に入ることだけが目的ではありません。人格（6 割）、生活習慣（2 割）、学力（2 割）が郁文館学園で定義する、幸せになるための 3 要素であります。その中の学力はないよりはあった方が良いと捉えております。そのため、自らの可能性に挑戦できる子どもを多く輩出するための目標として掲げております。

●経営改革

① 銀行の借入金金利の削減（3千万／年）

② 賞与のカット（1億／年。世間並みに年間4ヶ月にした。従来は6ヶ月保証されていた。）

③ 旅行業者の変更（海外研修費用65万／人→35万／人）

④ 制服業者の変更（4万円代が2万円代へ）４２５００円→２９０００円

⑤ その他経費削減（自動販売機のマージン増加、コピーカウンター料金減少、消耗品コスト削減、学食の委託業者変更。）

⑥ 年1回の理事会を毎月の経営会議へ

⑦ 宣伝広告費2000万円削減（例：だれも見ない駅看板、付き合いでやっていた雑誌購読、広告を削減。）

⑧ 補助金の増額（1億円）→規定に関して無知であったために今まで毎年1億円少なかった。

⑨ 労働組合自主解散

⑩ 職員会議や校務運営会議に保護者が参加

⑪ 光熱費削減のためのシステム導入（不要な電気をコンピュータ制御でカット）

⑫ お中元、お歳暮の受け取り禁止

⑬ 教師の出校日数の増加（自主的）

⑭ 教員の遅刻が0に。（改革前は毎日20人は遅刻していた。また、朝礼では隠れて食事をしていたものもいた。）

⑮ 校長による授業巡回→指導

⑯ 理事会メンバーの人数縮小し（5人）機能的な意思決定を実現。

⑰ 長野県の研修センターの活用（不良債権化していた、建築費50億のホテルが、現在は子どもたちが「夢」を作るための「夢」合宿の場として使われています。）

●教学改革

① 教師研修（ワタミの人材開発部でビジネス研修を実施。学内で教科統括部長による実践的な指導法研修を実施）

② 業務計画に沿って実行（今まで計画がなかった。又はあったとしても形骸化していた。）

③ 0時限補習（1時限が始まる前に補習を行う。∵放課後は部活に専念させるため。）

④ 赤点者は合格まで再テスト。また、その間は部活動停止。

⑤ 校内美化活動→一夜にして整理整頓された美しい学校となる（生徒1人1人に役割があり、それを毎日行い、さらにチェックリストに基づいて発表される。）

⑥ 生徒の遅刻の激減（郁文改革前は600人／日の遅刻者がいたが、2003年4月の改革が始まり100人／日に、2004年4月には50人／日に、そして6月にはついに0となった。）

⑦ 学内は明るく元気な挨拶が生徒も教師も行うようになった。（郁文十訓を毎日実践した結果、改革前には挨拶のなかった学校が、挨拶が徹底された学校となった。）

●平成16年度実施項目

①「夢」合宿　（参考資料）

②「夢」シートの活用（夢の設定と計画化）

③社会科見学→ワタミファーム、リサイクルの勉強等

④体育祭→東京体育館を貸切、感動的な体育祭

⑤文化祭→露店対象者に対して起業家講座実施（プロのベンチャー・キャピタリストによる指導）

⑥海外研修（日本と海外の差異の認識と原因分析。現地の同学年との文化・スポーツ交流。）

⑦教員の研修（ビジネス講座、教科指導講座）

⑧ 国際高校の改革→①全員1年間海外留学②英語で授業③効率性の高いプロジェクター授業

⑨ 修学旅行（北海道での農業・漁業体験を通じて第一次産業を学ぶ。）

⑩ 理事長講座（夢を作るために必要な力を選択肢を提供。別途参考資料）

⑪ 新給与体系の開始→年功部分少なく役職部分を大きく。賞与は評価により最大4ヶ月の開きがある

⑫ 新評価体系の開始→360°評価（本人、生徒、保護者、教師間、上司または部下、校長（目標達成））

⑬ ISO14001の取得→2005年にISO9001の取得

⑭ 教師1人にパソコンを支給し、学内LANを構築。学内メールと情報の共有化。

●参考資料：「夢」合宿

２００４年度より、「夢」合宿がスタートします。「夢」合宿とは、郁文館の目的である「子どもたちに、夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせる」ことを実現させるために実施する行事のことです。この合宿は、中１では６日間、その他の学年では１０日間実施されますが、合宿という形式で行なうことで効率的かつ集中的に生徒を指導することができます。

では、この「夢」合宿とは具体的にどのような合宿なのかご説明いたします。夢を実現するためには、大きく２つのことが必要です。一つは夢を実現させるための「能力」を身に付けることです。もう一つは、「明確な目標設定をする」ことです。夢合宿では、これら２つのことを学びます。

１点目についてご説明します。この「能力」とは３つの能力に分けることができます。一つ目はＩＱ(Intelligence Quotient)です。これは夢を実現するために必要な情報量（学力・知力）のことです。「夢」合宿には勉強合宿の意味もあり、少数に分けたクラスで勉強を行ないます。二つ目はＥＱ(Emotional Quotient)です。これは、一般に心の知能指数と言われますが、ここでは感性・社会性のことを示します。つまり、対人関係や集団生活の中で、人と協調性をもって、目標を成し遂げることのできる能力です。「夢」合宿では、農業、山登りなど集団で協力しなければ成し遂げられないイベントが組まれています。三つ目はＳＱ(Spiritual Quotient)です。これは、人生観のことです。つまり、自分の長所は何かを知り、それを伸ばすことで自分の将来への方向性を決める能力のことです。夢合宿では、多方面で活躍している方々の生き方を学ぶためのプログラムを用意しております。以上、これら３つの能力をバランスよく伸ばすことで、最終的に夢を実現できる能力ＤＱ(Dream Quotient)を高めます。

次に２点目についてご説明します。夢を実現させるためには「明確な目標設定をする」ことが必要です。そのため、「夢」合宿では、生徒各人が自らの人生の目標を決めるように指導します。そして、決めた目標を達成するために、毎日やるべきことをチェックしていきます。合宿形式であるため、毎日、先生が生徒の進行状況を確認し、生徒を励ましていきます。

夢を実現させることは並大抵のことではありません。しかし、夢を持つことができ、それを達成させるためのプロセスを学び、それを支えるメンター（人生の師）がいれば、だれでも実現できるのです。「夢」合宿は、これらを短期間で学ぶイベントなのです。

理事長講座シリーズ「夢」プログラム

1．プログラム全体の目的

「子どもたちに夢を持たせるために、物事の本質を捉える判断力を高めさせ、職業選択に必要な知識や経験を提供する」

郁文館学園では学園の理念を「子どもたちのためだけに学校はある」と定めています。そして、目的は「子どもたちに夢を持たせ、夢を追わせ、夢を叶えさせる」と定めています。この目的を実現させるためには、まず子どもたちが人生の成功者となるために、自分の夢を設定させます。しかし、夢を設定するためには前提が２つ必要になります。

一つ目の前提は、世の中の職業を知ることです。つまり、夢の選択肢を多く持つ必要があるということです。もう一つは、世の中（世界、日本）で起こっている様々な社会問題や社会の仕組みを知る必要があります。これらは単に知識として知るだけでなく、このような問題を考えることにより本質的な視点（根源的視点、多面的視点）を学ぶことも同時に意味します。なぜなら、本質的視点がなければ、表面的な知識に惑わされ、自分の人生の方向性を間違えてしまう可能性があるからです。

そこで、理事長講座では、5 年間（中 1 から高 2）かけて、本質を捉える判断力の養成と職業選択のための選択肢（知識と経験）の提供を行います。

2．プログラム全体の構造

2.1　学年別プログラム構造

<table>
<tr><th></th><th>中１</th><th>中２</th><th>中３</th><th>高１</th><th>高２</th><th>実施年度</th></tr>
<tr><td>概要</td><td colspan="2">世の中で起こるマクロ的な問題を学習テーマとすることで、本質的、多面的視点を養成します。</td><td colspan="2">職業選択のための業種、職種を学ぶことで、夢の選択肢を広げます。</td><td>組織人として活動する体験を通じて、自らの役割、適性を認識します。</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">プログラムⅠ</td><td rowspan="2">環境講座
医療講座
国際関係講座
政治講座</td><td rowspan="2">地球規模の問題から本質的視点を学ぶ</td><td rowspan="2">製造業講座
流通業講座
ｻｰﾋﾞｽ業講座
金融業講座</td><td rowspan="2">経済構造を学ぶことで職業選択のための業種を知る</td><td rowspan="4">起業体験講座</td><td>平成 17 年度
平成 19 年度
平成 21 年度</td></tr>
<tr><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">プログラムⅡ</td><td rowspan="2">リサイクル講座
介護講座
発展途上国講座
法律講座</td><td rowspan="2">身近な問題から本質的視点を学ぶ</td><td rowspan="2">専門職講座
（40 種類）</td><td rowspan="2">多様な専門職を学ぶことで職業選択肢を増加させる</td><td>平成 18 年度
平成 20 年度
平成 22 年度</td></tr>
<tr><td></td></tr>
</table>

中１、中２において、世の中で起こるマクロ的な問題を学習します。プログラムⅠとプログラムⅡでは、それぞれ、環境、医療、国際関係、政治という４つの地球規模の問題とリサイクル、介護、発展途上国、法律という４つの身近な問題を使って本質的視点を学びます。ⅠとⅡのプログラム内容の関係は、それぞれ明確に対応しています。つまり、一つのテーマをマクロ的な視点とミクロ的な視点の双方から捉えていくことで、それぞれのテーマを多面的に捉えます。

中３、高１の講座は、ビジネス色の強い講座となっています。なぜなら、職業選択を前提としているためです。プログラムⅠでは経済構造という視点から職業選択のための業種の意味を習得します。プログラムⅡでは多様な専門職の種類を学びます。この２つの観点から職業選択の幅を広げ、夢の設定を明確にします。

最後に高２の講座では、擬似会社を作り、そこで活動することで、自分の役割や適性（アントレプレナー、リーダー、企画、会計、マーケティングなど）を学びます。今まで学んできた本質的視点と職業選択肢の拡大により人生の方向性を見出すことはできますが、そこには社会人として、また組織人として自分にはどのような役割や適性があるかを知る機会はありません。そこで高２の講座では、そのような役割や適性を実践的活動を通じて学びます。

以上のように、理事長講座は、本質的視点という捉え方を基盤として、職業選択のための知識と実践的な場を提供することにより職業の選択しを拡大させ、さらに起業経験を通じて自らの適性を明確にさせることで、夢の設定を可能にさせます。

2.2 各プログラムの目的と概要

1） 中1、中2 対象講座

目的：「世の中で起こっている社会問題を学習することで、単なる表面的現象だけでなく、多面的視点や根源的視点を学ばせる」

【プログラムⅠ】

①環境講座→地球上で起こっている環境問題をマクロ的に理解し、その根源を知る

②介護講座（高齢化社会、年金問題含む）→介護問題の現状とその原因を知り、今後の未来に対して何が必要であるかを知る。

③発展途上国講座→問題の原因を地理的、歴史的、民族・文化・宗教的視点からマクロ的に知り、自分達に今できることを知る。

④政治講座→政治が自分達の生活とどれだけ強い相関関係があるかを知り、政治に対する認識を変える。

【プログラムⅡ】

① リサイクル講座→リサイクルの現状と日々の実践方法を学ぶ。

② 国際関係講座→国際紛争についての現状把握と根源的原因を分析する。

③ 医療問題講座→現在起こっている医療問題とこれから求められる医療の役割を学ぶ。

④ 法律講座→法治国家としての日本を認識する。

2） 中3、高1対象講座

目的：「経済構造や多様な職業を学ぶことで、職業選択のための選択肢を提供する」

【プログラムⅠ】

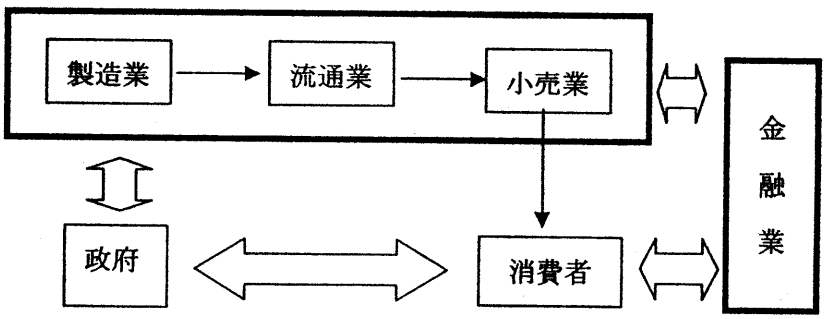
①製造業講座

②流通業講座

③サービス業（小売業）講座

④金融業講座

図1：4つの業種と政府、消費者との関わりについて

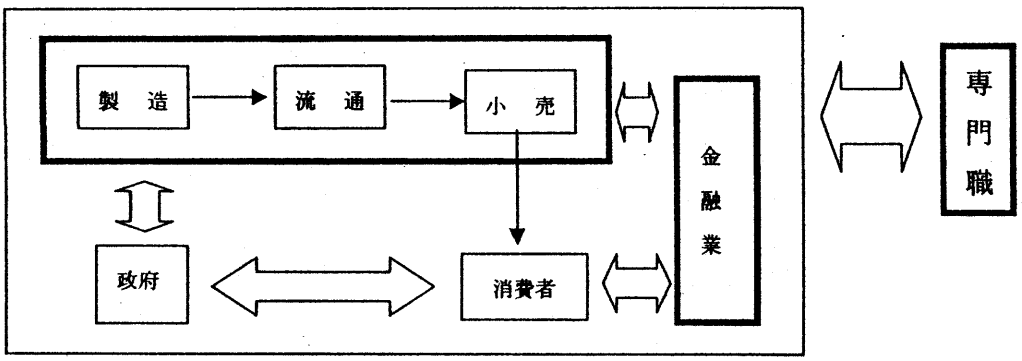


様々ある業種の中で、4つの業種（太枠部分）を基本的な業種として捉えています。

【プログラムⅡ】

40 種類の専門職業人によるワークショップ

図２：経済活動と専門職との関係



プログラムⅡでは、専門職が経済活動に関わっていることを学びますが、その構造を示したものが図２です。

３）　高２対象講座

目的：「起業体験を通じて、自らの役割、適性を認識させる」

起業体験講座→郁秋祭において会社を擬似起業することで、会社組織の原理と実践を学ぶだけでなく、自らの役割、適性を認識させます。

3．各講座内容

3.1　中1、中2対象講座

【プログラムⅠ】

1）環境講座→地球上で起こっている環境問題をマクロ的に理解し、その原因を根源的に捉える。

【講座のねらい】

地球全体を見たときに、環境問題として、大気汚染、水質汚濁、CO_2問題、森林伐採、オゾン、酸性雨、騒音、海水温上昇（エルニーニョ）など様々ある。なぜこのような問題が生じているのか、日々の生活と関係がどの程度あるのか、という視点で現実を知る。最終的にこれらの問題の原因はいくつかの点に集約できることを知り、自分達が日々どのような心がけが必要なのかを学ぶ。

【講座の構成】

＜1日目＞　事前学習

① 地球上で起こっている環境問題をマクロ的に学習する。

② 本質的原因の仮説構築を行なう。

＜2日目＞　講演

① 講演内容は、数ある環境問題の中の一つを挙げてもらい、映像を使って現状を知る。

② 一つの環境問題の原因は全ての環境問題の原因に通じることを知る。

＜3日目＞　見学（リサイクルセンターと環境破壊の現場の2種類）

① 身近にできるリサイクルの効果を実際に見ることで、環境問題は自分一人でも取り組むことができることを知る。

② 環境破壊の現場に行き衝撃を体感することで、環境問題への取組みの意欲を高める。

＜4日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

② ディスカッションの内容は、環境問題の根源的原因の分析と日々の環境改善アクション・プランの構築

2）介護講座（高齢化社会、年金問題含む）

→介護問題の現状とその原因を知り、今後の未来に対して何が必要であるかを知る

【講座のねらい】

介護問題を時系列でとらえる。現状の問題点から、過去の原因、未来に想定される問題点の3つの時点で学ぶ。また、介護問題（高齢化社会）は、医療技術の発達、年金問題、食糧問題との連関があることを包括的かつ有機的に学ぶことで、単に介護というミクロ的な問題ではないことを知る。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① 介護問題と関連のある問題を学習する。

② この問題の解決策の仮説構築を行なう。

＜２日目＞　講演

① 介護現場の状況を知る。

② 介護にはらむ問題点を知る。

＜３日目＞　介護体験（ボランティア）

① 聞くこと、見ることと体験することの違いを知る。

② ボランティアとはさせていただいていることを知る。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

② ディスカッションの内容は、介護問題と他の問題点の相関を分析し、単に高齢者だけの問題ではなく、自らの問題でもあることを理解したものとする。

3）発展途上国講座

→問題の原因を地理的、歴史的、民族・文化・宗教的視点からマクロ的に知り、自分達に今できることを知る。

【講座のねらい】

発展途上国の貧困問題に焦点をあてていく。この問題は、地理的問題、歴史的問題、民族・文化・宗教的問題と関係があることを知り、多面的に分析する。一つの問題点の背景には多くの問題が潜んでおり、必ず根源的問題が存在することを、発展途上国問題から学ぶ。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① 多面的アプローチにより、発展途上国の現状を知る

② この問題の解決策の仮説構築を行なう。

＜２日目＞　講演

現在、発展途上国における貧困問題、特に子供達がその犠牲になっている現状を知ることで、自らの豊かさの再確認と一生懸命生きることが大切であることを学ぶ。

＜３日目＞　見学

国連やユニセフなど国際機関を訪問し、世界の発展途上国の現状を国際機関を通して知る。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

② ディスカッションの内容は、発展途上国問題の多面的な視点で根源の分析し、これらの先進国としての役割、さらには自分は何ができるかを知る。

4）政治講座

→政治が自分達の生活とどれだけ強い相関関係があるかを知り、政治に対する認識を変える。真の意味での「主権者」意識を育てる。結果として、当然のこととして選挙に行く（投票する）大人に育てる。

【講座のねらい】

本講座のねらいは２つある。一つは、中高生にとって縁遠い政治という世界が実は自分たちの生活に大きな影響を与えるものであると同時に、実は自分たちがそれを変え得る主人公であることを知る点にある。もう一つは、異なった政党によって、異なった主張や考え方があることを知る。民主主義とは何か、つまり選択肢の競争だということを知ることにある。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① 政治の全体像を知識として知る。

② 各政党の特徴を知る。

＜２日目＞　講演

与党、野党の各党による講演会を実施する。党によって、主張や主義が異なり、それによって政治がどのように変わっていくかを知る。

＜３日目＞　見学

国会議事堂の見学。通常は入ることの出来ない場所まで入ることにより、政治の深奥まで体感することができる。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

② 今まで学んだ問題点（環境、介護、発展途上国）を解決させるためには政治が密接に関係していることを認識し、自分たちも参加して解決しようという意識を持たせる。

【プログラムⅡ】

1）リサイクル講座→リサイクルの現状と日々の実践方法を学ぶ。

【講座のねらい】

リサイクルの必要性を学ぶことには２つの大きなねらいがある。一つは、日々の実践方法を学ぶ点である。環境教育は現状を知るだけでなく、自らが日々実践してはじめて効果があるものである。もう一つは、物を大切にするという考え方を学ぶ点である。創意工夫により限

られた資源を有効活用することが人類の進歩発展には必要であることを学ぶ。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① リサイクルの現状を知る

② リサイクルの方法を知る。

＜２日目＞　講演

リサイクルに携わっている専門家による、映像を使った授業を行う。見学では見ることのできない映像学習により、リサイクルの意識を向上させていく。

＜３日目＞　見学

身近なものがリサイクルされて、再利用される過程を知る。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

② ＩＳＯ14001 教育への意識の向上を行う。

２）国際関係講座→国際紛争についての現状把握と根源的原因を分析する。

【講座のねらい】

国際紛争の根源が、民族問題や宗教問題などの表面には現れない問題に帰結する点を学ぶことで多面的思考を養成する。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① 世界の国際紛争の歴史（現状含）を知る。

② 紛争に関連する周辺知識を学習する。

＜２日目＞　講演

紛争の映像を通して授業を行う。なぜこのような紛争が起こるのかとうい問題意識を高める。

＜３日目＞　見学

国連機関を訪問し、現状認識を持つ人々と交流する。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

3）医療問題講座→現在起こっている医療問題とこれから求められる医療の役割を学ぶ。

【講座のねらい】

昨今の医療問題の種類とその原因について学び、医療についての関心領域を拡大させる。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

① 医療問題の種類を学ぶ。

② 医療に関する基本知識を習得する。

＜２日目＞　講演

医療現場に携わる方による、実際の体験談に基づいた講演で、医療問題の原因分析を行う。

＜３日目＞　見学

実際に医療現場に行くことで問題意識を高める。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

4）法律講座→法治国家としての日本を認識する。

【講座のねらい】

ねらいは大きく２つある。一つは、単に法律を知識として知るだけでなく、法律の持つ力の大きさを学ぶ点である。もう一つは、日常においても法律がいたるところで適用されるとう現状を知ることで、身近な分野であることを知る点にある。

【講座の構成】

＜１日目＞　事前学習

法律の種類を学ぶ。

＜２日目＞　講演

実例に即しながら、法律の有効性、実効性を学ぶ。

＜３日目＞　見学

裁判所を訪問。

＜４日目＞　グループ・ディスカッション

各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

3.2　中3、高1対象講座

【プログラムⅠ】

【講座のねらい】

本講座には、2つのねらいがある。一つは、様々な業種を知ることである。世の中には多くの業種、業態が存在するが、その中で基幹ともいえる4つの業種に絞り、それらの業種がそれぞれ何を目的として業を営んでいるかを知る。もう一つは、自らの人生の方向性を決定する一助と成ることである。必ずしも、これら4つの業種に自分の人生の方向性があるとは限らないが、どのような方向へ進むにせよ、様々な業種を学ぶことは今後の人生を歩む上で重要なことである。

【講座の種類】

① 製造業講座
② 流通業講座
③ サービス業講座
④ 金融業講座

【講座の構成】1つの講座につき、次のような日程でそれぞれ実施。

＜1日目＞　事前学習

① 企業、家計、政府というマクロ的な関係を学ぶ。
② 各業種の構造を理解する

＜2日目＞　講演

代表企業による講演を実施する。事前学習でマクロ的な学習を進めた後、講演によって、具体化したテーマに基づいて学習する。

＜3日目＞　見学

工場、店舗を見学し、講演内容について実際に目で見て体感する。

＜4日目＞　グループ・ディスカッション

① 各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう。

【プログラムⅡ】

【講座のねらい】

本講座は、2つのねらいがある。一つは、代表的な専門職を学ぶことで、経済活動との関わりにおいて、重要な専門的役割が存在することを学ぶ点にある。もう一つは、各専門職がどのような仕事を行っているのかを知る点にある。

【講座内容について】

全部で40種の職業人を招聘し、ワークショップの形で授業を行う。

【講座の構成】１つの講座につき、次のような日程でそれぞれ実施。全部で４ターム。

＜１日目＞　事前学習

① 業務内容を知る。

② 資格を取得するまでの流れを知る。

＜２日目＞　ワークショップ

専門家による講座１０種類

＜３日目＞　グループ・ディスカッション

各自でまとめたレポートに基づきグループ・ディスカッションを行なう

３．３　高２対象講座

【講座のねらい】

本講座は、会社の作り方、会社の構造を事前に勉強した後で、１０月の文化祭において高２を対象に擬似会社の設立を行い、決算発表まで行なう一連の流れを体験する講座である。このような流れの中で、講座のねらいは次の３点に集約する。

① 会社の作り方、会社の構造を知る。

② 協調関係により組織が成り立っていることを知る。

③ 組織の中における役割を通じて自らの適性を知る。

【講座の構成】

＜1 日目＞　事前学習①（社会の仕組　直接金融と間接金融など）

＜２日目＞　事前学習②（会社の仕組　会社はどのようにして運営されているのかなど）

＜3 日目＞　事前学習③（会社設立手順説明会）

＜4 日目＞　会社設立および投資家に対するプレゼンテーション

＜5 日・6 日目＞　文化祭における実際の営業（6 日目は決算発表会）

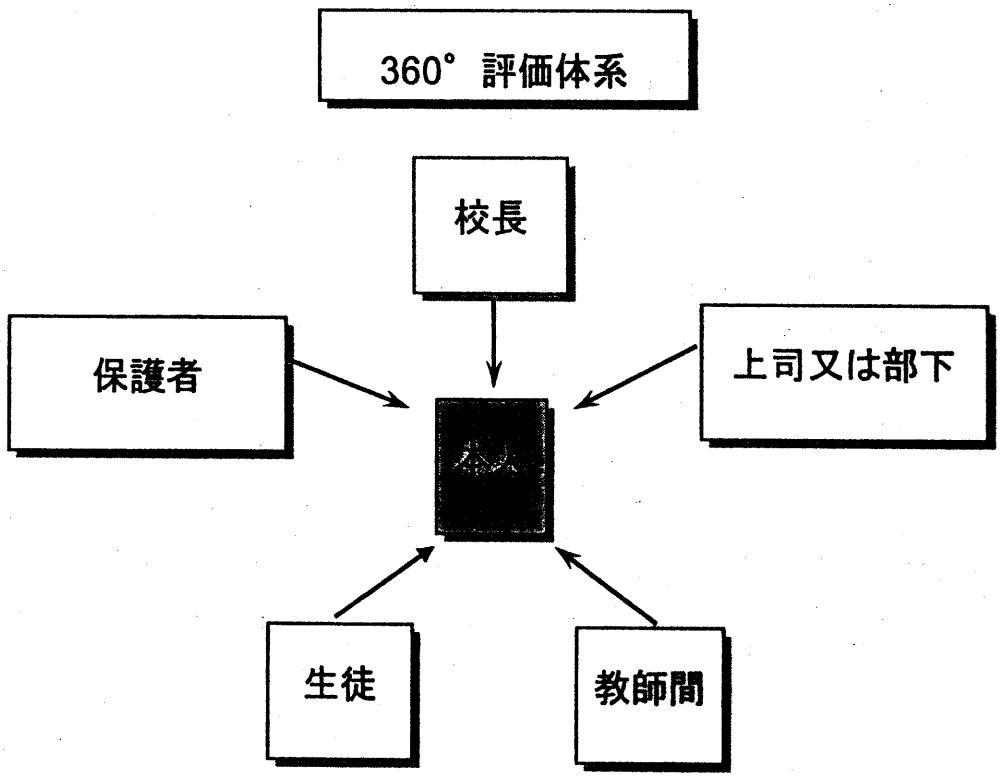
＜7 日目＞　各自のレポートに基づき、ディスカッション

360° 評価制度

1．360° 評価について

一般的に数種類の評価者から受ける評価において、評価は、数人の評価者の主観的判断によって、偏った評価になることがよく知られている。したがって、多面的な評価が最も適切であるという考えに則り、この360°評価を作成した。

360° 評価は全部で６つの観点から構成される。６つの観点とは、生徒、教師間、保護者、上司（部下）、校長による評価、そして自己評価である。この６つの観点はそれぞれ、違った観点を持つものであり、被評価者が公正かつ正確に評価されることを目的として選択された観点である。



2．５つの評価項目について

1）生徒アンケートによる評価

①生徒アンケートについて

生徒アンケートは年２回（7 月と 12 月の期末テスト時）担当する科目の先生全員に対して実施するものである。評価項目は全部で４項目あり、◎○△×（◎は３点、○は２点、△は１点、×は０点に換算）の４種類でそれぞれの項目を先生毎に生徒が評価する。（体育科・芸術科は評価項目が異なる）

②360° 評価への換算について

評価は３点満点で教師毎に算出される。その結果を以下の換算表に基づき、360° 評価へと算入される。

合計得点	360° 評価への算入得点
2.5 以上　3.0 以下	5
2.0 以上　2.5 未満	4
1.5 以上　2.0 未満	3
1.0 以上　1.5 未満	2
1.0 未満	1

合計得点は小数第２位を四捨五入し、小数第１位まで算出。

③注意点

a）回答数が 40 未満の場合は、有効回答数とは数えられず、その場合の教師の生徒アンケート評価は除外される。

b）中学生による評価と高校生による評価には一定の偏りほとんど生じないため、補正は行わないものとする。（過去２回のデータの基づく点数による）

c）体育科および芸術科目については科目の特性に合わせ、評価項目が異なる。

2）教師間評価

①教師間評価について

教師間評価とは、同じ科目を指導する教師が、他の教師の授業を評価することである。この評価は一定の項目により、半期（半年）に２回行い、その平均値が算出されて評価点となる。

得点は、１点～10 点の 10 点満点で算出される。

②360° 評価への換算について

360° 評価への換算は、算出された値を５点満点に圧縮（２で除する）して算入する。

③注意点

a）芸術科目については、教師間評価を対象外とする

b）この評価の取りまとめは、教科主任が行い、結果を各人へフィードバックする。（各人の自己研鑽に生かす）

c）体育科は別途用紙を使用する。

3）保護者からの評価

①保護者からの評価について

保護者からの評価には、年間2回、保護者から担任が受ける評価のことである。この評価を行うにあたって、事前に保護者対象説明会にて、項目について告知する。この告知によって観点を明確にすることが可能となる。評価は4段階（例：とてもそう感じる・そう感じる・あまり感じない・全く感じない）3点満点の評価となる。

②360°評価への換算について

360°への換算は生徒アンケートと同様の方式である。

合計得点	360°評価への算入得点
2.5以上　3.0以下	5
2.0以上　2.5未満	4
1.5以上　2.0未満	3
1.0以上　1.5未満	2
1.0未満	1

合計得点は小数第2位を四捨五入し、小数第1位まで算出。

③注意点

担任を持たない者は対象外となる。

4）上司（部下）からの評価

①上司からの評価とは

上司からの評価とは、校務分掌として各自が各セクションの上司より受ける評価のことである。この評価の目的は3つある。一つ目は協調性である。セクション毎に、行うべき内容を協調性を持ってできたのかどうかを評価するものである。二つ目はコミットメント（関与）である。コミットメントの評価とは、行うべき内容に対して積極性を持っていたかを評価することである。最後は成果である。行うべき内容を正確に、期限までに仕上げることができたのかという評価である。以上の3つの評価を4段階3点満点で評価し、平均値を上司からの評価値とする。

②部下からの評価とは

部下からの評価とは、上司である者が、そのセクションにおける部下から受ける評価のことである。この評価の目的は3つある。一つ目はリーダーシップである。上司である者が、業務を遂行する上で、そのセクションの部下に対して十分リーダーシップを発揮したかどうかを評価する。二つ目は、指示伝達である。部下に対して業務方法を事前に指導し、円滑に業務遂行できるように部下に対して指示伝達を行ったかを評価する。最後は部下の育成である。部下に対して、業務のやり方を指導して、育成できたか否かを評価する。以上の3つの評価を4段階3点満点で評価し、平均値を部下からの評価値とする。

②360°評価への換算について

360°評価への換算は、以下の表にしたがって行う。

合計得点	360° 評価への算入得点
2.5 以上　3.0 以下	5
2.0 以上　2.5 未満	4
1.5 以上　2.0 未満	3
1.0 以上　1.5 未満	2
1.0 未満	1

③注意点

a）校務分掌に属していない者は対象外。

b）上司は役付きであること（役職手当があること）

c）評価は３が平均となる相対評価とする

④評価経路

校長	教頭		
	教務部長	副部長	
		学年主任	当該学年の担任
	生徒指導部長	副部長	
	教科統括部長	副部長	
		教科主任	教科担当者
	入試室長	副室長	
	進路指導部長	副部長	
	夢プロ幹事		
	学習センター長	主任	
	美化担当幹事		
	保健室長 兼保健主事		

★ 例１：教科主任は、上司である教科統括部長の評価を行うと同時に部下である教科担当者の評価を行う。

★ 例２：教科統括部長は、教科主任の評価を行う。

5）校長評価（絶対評価）

①校長評価とは

校長評価とは、評価期間（半期）中に各教員が行った目標達成シートに基づき、校長の判断と合わせて総合的に、Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄの評価と行うことをいう。

②360° 評価への換算について

360° 評価への換算は次のように行う。

Ｓ評価→５
Ａ評価→４
Ｂ評価→３
Ｃ評価→２
Ｄ評価→１

③目標達成シートについて

目標達成シートは、教員の「夢」シートに記載されている目標達成項目を使用する。詳細は「夢」シートの使用方法を参照。

６）自己評価（絶対評価）

学習指導力、生徒指導力、進路指導力、学級・学年・学校運営、服務その他、自己啓発関係の６大項目について、半期に一度、自己評価を行う。この内容は、各自の主観によって判断されるものである。

評価は、○か×の２種類の評価である。この○の数に応じて、それぞれ５段階の評価に振り替える。

○の数（77 項目中）	360° 評価への算入得点
７０以上	5
６０～６９	4
５０～５９	3
４０～４９	2
３９以下	1

3．６つの評価から360°評価への換算について

1）360°評価への算出表

生徒アンケート、教師間評価、保護者評価、上司による評価、校長評価で得た数値にそれぞれ1/6を乗じ、それぞれを加算する。その結果5点満点の評価点数が得られる。

2）最終評価

① 原則

以下の表に従い絶対評価の判定を行う。

総合計得点	掛け率
4.5以上	6.6
4.0以上～4.5未満	6.1
3.75以上～4.0未満	5.6
3.5以上～3.75未満	5.1
3.25以上～3.5未満	4.6
3.0以上～3.25未満	4.1
2.75以上～3.0未満	3.6
2.5以上～2.75未満	3.1
2.5未満	2.6

合計得点は小数第3位を四捨五入し、小数第2位までで算出。

② 補正処理

上記2）①における評価に基づく賞与総額が賞与枠を超える場合、各人の賞与額の比率を変えずに、賞与額を圧縮する。

例）賞与枠1億円に対して、360°評価の基づく賞与額の合計が1億1000万円のとき、
補正前の各人の賞与額×1億／1億1000万＝補正後の各人の賞与額となる。

４．講師の評価について

１）評価項目について

講師の評価は次の３つの評価により最終的に判定される。

① 生徒アンケート（掛け率１／３）

② 教師間評価（掛け率１／３）

③ 上司（教科主任）による評価（掛け率１／３）

※芸術科目の教師間評価はありません。よって、その場合の掛け率は１／２づつとなります。

２）最終評価の判定について

最終評価の算出法は、上記の３の２）に準じる。

５．評価時期と評価集計時期について

評価は４月～９月までを前期、10月～3月までを後期とする。前期は10月7日までに評価を終了し、10月14日までに全員の集計を完了させるものとする。後期は4月11日までに評価を終了し、4月18日までに全員の集計を完了させるものとする。（講師は3月10日までに集計を完成させる）

評価の種類	前期　実施月	後期　実施月
生徒アンケート	7月 （期限：期末テスト最終日）	12月 （期限：期末テスト最終日）
教師間アンケート	6月（期限：30日）	11月（期限：30日）
保護者アンケート	9月 （1日に送付・期限：20日）	1月 （1日に送付・期限：20日）
上司（部下）による評価	9月 （期限：期末テスト最終日）	1月 （期限：期末テスト最終日）
校長による評価	10月（期限：7日）	4月（期限：17日）
自己評価	9月 （期限：期末テスト最終日）	1月 （期限：期末テスト最終日）